

古文読解の入試形式に取り組む

読み方ガイド 1 | 古文を根拠に即して読む

四つの文章、全32問で100点。目安は60分です。特定の都道府県の入試形式を再現したものではありません。

最初に本文の見取り図を作る

語注を読み、人物と場所、出来事の順序を確かめます。随筆では、出来事を述べる部分と筆者の評価の部分に注目。難しい語があっても、前後のつながりを追いましょう。

時間の配分

Aは12分、Bは15分、Cは15分、Dは18分が目安です。初回は時間を気にせず解いてもかまいません。長い記述で止まりすぎず、書ける要点を短く整理して進みましょう。

点数の確かめ方

各文章は25点。語句・内容の短答から、理由・対比・要旨の記述へ進みます。選択は記号を○で囲み、抜き出しは指定範囲と字数を厳守します。記述では意味が同じなら別の表現も認めます。

選択肢も記述も根拠で判断する

読み方ガイド 2 | 古文を根拠に即して読む

もっともらしい常識や、知っている作品の記憶だけで答えず、この教材に掲載した本文に戻ります。

選択肢はずれの種類を見る

主語・時の前後・原因と結果・程度の言い過ぎを確かめます。本文にない事情を加えた選択肢は、常識的にありそうでも選びません。伝聞と実際に確かめたことも区別します。

対比は同じ観点でそろえる

二人や二つの場面を比べる時は、片方が行動、片方が気持ちという書き方にせず、過程どうし・結果どうしなど同じ観点にそろえます。接続語や繰り返される表現が手がかかります。

記述は必要な内容を先に決める

理由なら原因、要旨なら主張、現代語訳なら語の意味と文の働きが必要です。原文にない想像を広げず、字数に合わせて自然な一文または二文にまとめます。

採点から次の復習へ

読み方ガイド 3 | 古文を根拠に即して読む

正誤だけでなく、どの情報を使い損ねたかを見ると、次の読解で改善できます。

全文訳でつながりを照合する

まず自分で本文を読み直し、それから解答の全文訳と照合します。「誰が」「何を」「なぜ」を補えたか、否定や推量を落としていないか確かめます。

記述の部分点を確認する

解説の採点基準は必要な内容ごとに示しています。意味の同じ別表現は認めます。内容点の合計後、字数条件を外れた場合は1点減点し、同じ不足を二重に減点しません。

間違いに合う復習をする

仮名や古語で失点したら基礎を、会話や主体で迷ったら主語の補いを、説明が不足したら対比・根拠の組み立てを復習します。もう一度解く時は、正解だけでなく根拠の位置も説明しましょう。